さて日本ではどんな材料が用いられて来たのであろうか。ソバ殻，籾殻，パンヤなどが大部分であると思われるが，米作が普遍的でなかった昔の生活では，それぞれの地域の産物が用いられたことであろう。昨年奥州の平泉に藤原三代の跡を尋ね，宝物館に入って目についたのは泰衡使用の枕であった。これは稗（ヒエ）のたぐいであった。当時主食にしていたものであろうか。久内老によれば ギシギシの実が よろしいという。スガモが使用されている地方もあるという。また特に次の報告を寄せられた。「茶殻を用いることはかなり広く分布している風俗で，私の家内も，幾瀬君も 知っておりました。あれにジャスミンかマイカイの乾燥花を 極く少量を混じて作った 枕でねたら華胥の夢を見ること受合いです。これはたしかに流行します，いかが」。

私はどこかでアズキ枕を用いたことがある。重厚で適当な冷感も覚えた気憶がある。記録によれば秩父の山中では サルオガセ枕が 使用されていた由である。こういう資料を一般の 読者諸氏から お寄せ 願いたいと思う。もし詰物の 工合によって 夢が コントロールされるならば，これを喜ぶ者は 只に布団屋某氏のみではなかろう。傍らに声あり，「安直には手枕，望むならば美人の膝枕を」と茶化すこと勿れ。

以上の原稿を書き上げ後，既に 2-3 の投書に接した。たとえば山下さんからは「黄楊とか，柚，蜜柑などの葉は如何でしようか。やって見ようと思って居ります。ヨーロッパでは クロイテルキッセンと称し牧草や薬草を枕に入れ，痛風などの治療に用いたり，実際の枕にも用いて居ります。次に油柑ですが，本草書には餘柑の別名が記されて居りますが，餘と油との類似から来た 転化ではないかと存じます。餘柑子の方が古い名称かと存じられます」と。また別人より，ウプサラのリンネ博物館にあるリンネ使用の枕や，パリーの ルーブルにある マリーアントアネットなどルイ王朝時代の貴人使用のものなど 調べたら如何との勧告があった。どうも是以上深入りすると まくらさがしの異名を受けるおそれもあるので，このへんで打切ります。（国立科学博物館）

□**The Pocket Oxford Dictionary, ed. 5., with A Supplement of Australian and New Zealand Words.** Oxford University Press, London, 1969. M/S $ 8,00 ; HK $ 13,50 ; ¥ 900. 今さら著明な英英辞典の紹介は場違いのような気もするが，巻末の 32 頁に 1,100 語に及ぶ，オーストラリアとニュージーランドの特有の語の付録があるのが，大いに役に立つので 紹介しておく。近頃ニュージーランドから日本に輸入される蜂蜜のレッテルには，蜜源植物の名が Rata だの Manuka だのと，現地名（マオリ語の名称）で書いてあるだけで，学名がないので 正体が わからなかったが，本版でオーストラリアとニュージーランドに 固有な植物や 動物の 現地名から学名を知ることができる。また *Nothofagus* は Birch の項にいれてあるので，これが現地での英語名として使用されていることがわかったし，ナンヨウスギは Hoop-pine, *Coriaria* は Tutu の由。（久内清孝，佐藤正己）